

論 文

処置場面における小児への援助方法の検討

染澤 直美*・島崎 朗子*・登美 洋子*

広瀬 育子*・西村真実子**

* (金沢大学医学部附属病院)

** (金沢大学医療技術短期大学部)

Study of assistance for children going through medical procedures

Naomi Somezawa, Akiko Shimazaki, Youko Tomi,

Yasuko Hirose and Mamiko Nishimura

Kanazawa University Hospital

School of Allied Medical Professions Kanazawa University

要 旨

痛みを伴う処置による小児の苦痛は大きい。苦痛を軽減する対処行動を、小児が処置場面で多く表現できるような援助を考えるためにこの研究を行った。方法は、処置場面での医療者の働きかけの実際を調べ、処置に対する小児の反応数と関連要因との関係を林の数量化I類にて分析、検討した。その結果、以下の結論を得た。

1. 医療者の働きかけは、どの発達段階とも進行状況の説明・励まし・慰める・ほめるが多かった。
2. 幼児期後半では抑制をした場合・病棟での処置の場合・医療者の働きかけが良い場合・入院経験が無い場合・母親の付添い無しの場合の方が小児の反応数が多い。
3. 学童期では入院経験がある場合・抑制をした場合・病棟での処置の場合・医療者の働きかけが悪い場合の方が小児の反応数が多い。